

## 保育者養成における学びの記録の効果的活用

野田 さとみ

### 1. はじめに

近年、保育需要の多様化を背景として、保育者の資質向上が課題となっている。学生たちは資格・免許を取得した後も、保育実践者として成長するために、自己を振り返り、自己に課題を課し、その方法を模索して自分の力で解決する力がますます強く求められている。保育者としての自己研修能力を高めるためには、保育に関わる知識・技術を単独のものではなく、保育者養成課程在学中における学修を科目横断的に結び付け、自らの課題として意識することが不可欠である。

保育者養成課程における各科目の学びを実践力へと結びつける科目として、幼稚園教諭免許では「教職実践演習(幼稚園)」、保育士資格では「保育実践演習」が設置されている。「教職実践演習(幼稚園)」では他の教職課程と同様に、免許取得に関わる科目や課外活動の履歴を記す「履修カルテ」の作成が義務付けられている。ここでは「履修カルテ」の作成を通して自らの学びの記録を整理し専門職を目指すにあつての自己課題を具体化することが目的とされる。

そこで本研究では、保育者養成の特質を踏まえ、教育課程を俯瞰し科目横断的に学びを記録する「履修カルテ」について、本学における試行から検討する。

### 2. 教職実践演習における履修カルテ

「教職実践演習」は平成18年7月に出された中央教育審議会答申で、教員として最小限必要な資質能力の全体について、教職課程の履修を通じて、確実に身に付けさせるとともに、その資質能力の全体を明示的に確認することを目的として教職課程で必修化された。答申では①使命感や責任感、教育的愛情等に関する事項、②社会性や対人関係能力に関する事項、③幼児児童生徒理解や学級経営等に関する事項、④教科・保育内容等の指導力に関する事項の4点を教職実践演習で取り扱う事項として示している。「履修カルテ」は、教

職実践演習の履修にあたって必ず作成すべきものとされている。「履修カルテ」作成の目的としては、教職実践演習が開講される最終学年次までの教職関連科目の履修状況、履修科目を通してどのような知識や技術を修得してきたのかを記録し、評価・診断することとされており、書式については、「教職実践演習における履修カルテの作成・活用例について」の通知(平成21年)で書式が例示されている。しかし、教員免許は幼稚園教諭から高校教諭まで、教育対象は幅広く、特に乳幼児期の保育・教育と就学以降の教育では教職課程のあり方が異なるため、保育者養成課程ではその専門性に合わせた工夫が必要となる(小山ら:2012, 新田:2013)。

そこで本研究では、教員免許に必要な科目に限定せず、基礎科目や保育士資格取得のための科目など、選択・必修の分類を問わず、個々の学生が2年間のカリキュラムの中で履修した科目をすべて記録対象とするとともに、課外活動についても合わせて振り返りができる書式を作成し試行することとした。

### 3. 履修カルテの実施方法および書式について

#### (1) 実施方法について

本学保育科は2年の保育者養成課程であるため、「教職実践演習(幼稚園)」は2年次通年科目として開講されている。そのため「履修カルテ」の記入は、4月(前期開始時)、9月(後期開始時)、1月(後期終了時)の3回実施した。

#### (2) 書式

学修科目は、保育科で開講されている教養科目・専門科目を図式化したカリキュラムツリーの構成に従い、6つのカテゴリーに分けた。それぞれのテーマは、教職実践演習における履修カルテの作成・活用例について「教育の本質的理解」(保育原理・教育原理・社会的養護などの原理系の科目)、「子どもの心とからだの理解」(発達心理学・

子どもの保健・保育臨床心理学などの子どもの心身に関わる科目)、「保育の表現技術の修得」(音楽、図画工作、幼児の体育、国語表現など表現技術系の科目)、「保育の内容・方法の理解・修得」(保育内容指導法〈健康・環境・人間関係・言葉・表現〉・乳児保育・障がい児保育などの子ども理解や指導法に関わる科目)、「実践力の修得」(教育実習・保育実習などの実習科目)、「課題探究力」(教職実践演習や課外活動など)であった。各カテゴリーについては、「教職実践演習における履修カルテの作成活用について」で例示された自己評価項目をもとに、教科を通した学習における到達確認指標を3～8項目設定した。学生は、4月・9月・1月の各時期で自己を振り返り、各カテゴリーの到達確認指標について「A：十分達成できた」「B：一応は達成できた」「C：まだ課題が多い」「D：出来ていない・取り組んでいない」の4段階で評価した。各カテゴリーの評価項目は表1に示す。また、それぞれの科目での学びから「保育者になるために特に取り組んだこと・努力したこと」を記述形式で記録するとともに、到達確認指標の結果と特に取り組んだことの記述をもとに、それまでの学びを振り返り、「達成点と問題点」・「次の課題」を記入した。

表1 カテゴリーごとの到達確認指標項目

教育の本質の理解	<ul style="list-style-type: none"> <li>① 保育職の意義や役割、職務内容、子どもに対する責務を理解している。</li> <li>② 教育・保育の理念、歴史・思想についての基礎理論・知識を習得している。</li> <li>③ 憲法、教育基本法、学校教育法、児童福祉法など、保育に関する基本的な法律の趣旨を理解している。</li> <li>④ 教育・保育の社会的・制度的・経営的理解に必要な基礎理論を習得している。</li> <li>⑤ クラス担任の役割や実務、他の職員との協力の在り方を理解している。</li> <li>⑥ 保護者や地域との連携・協力の重要性、そのあり方を理解している。</li> <li>⑦ 建学の精神に基づく保育職としての人間観・倫理観を理解している。</li> </ul>
子どもの心理的理解	<ul style="list-style-type: none"> <li>① 子ども理解のために必要な心理・発達論的基礎知識を習得している。</li> <li>② 虐待や問題を抱える子どもなど、個々の子どもの特性や状況に応じた対応の方法を理解している。</li> <li>③ 子どもの健康・安全な生活を保障するための基礎知識を習得している。</li> </ul>

保育の表現技術の修得	<ul style="list-style-type: none"> <li>① 保育を行う上での基本的な音楽表現の技術を身に付けている。</li> <li>② 保育を行う上での基本的な言語表現の技術を身に付けている。</li> <li>③ 保育を行う上での基本的な造形表現の技術を身に付けている。</li> <li>④ 保育を行う上での基本的な身体表現の技術を身に付けている。</li> </ul>
保育の内容・方法の理解・修得	<ul style="list-style-type: none"> <li>① 遊びや生活の集団を形成するために必要な基礎理論を習得している。</li> <li>② 幼稚園教育要領・保育所保育指針の内容を理解している。</li> <li>③ 教育・保育課程の編成に関する基礎理論・知識を習得している。</li> <li>④ 保育内容の指導法にかかる基礎理論・知識・技能を習得している。</li> <li>⑤ 情報教育機器の活用にかかる基礎理論・知識を習得している。</li> <li>⑥ 遊びや保育に関する教材を分析し、保育内容に応じて選択することができる。</li> </ul>
実践力の修得	<ul style="list-style-type: none"> <li>① 子どもたちの発達段階を考慮して適切に接することができる。</li> <li>② 指導計画のねらいと内容に応じた援助を構想し、子どもの反応を想定した指導案としてまとめることができる。</li> <li>③ 指導計画に応じた教材を準備することができる。</li> <li>④ 子どもたちの反応を生かし、指導者の指導を受けながら保育を展開することができる。</li> <li>⑤ 子どもたちに親しみを持った態度で接することができる。</li> <li>⑥ 子どもの声を真摯に受け止め、公平で受容的な態度で接することが出来る。</li> <li>⑦ 挨拶、言葉遣い、服装、他の人への接し方など、社会人としての基本的な事項が身についている。</li> <li>⑧ 他者と共同して保育を企画・運営・展開することができる。</li> </ul>
課題探究力	<ul style="list-style-type: none"> <li>① 自己課題を認識し、その解決に向けて学び続ける姿勢を持っている。</li> <li>② 社会状況や時代の変化に伴い生じる子どもの変化を進んで捉えようとする姿勢を持っている。</li> <li>③ 他者の意見やアドバイスに耳を傾け、理解や協力を得て課題に取り組むことができる。</li> <li>④ 集団において、他者と協力して課題に取り組むことができる。</li> <li>⑤ 集団において率先して自らの役割を見つけたり与えられた役割をきちんとこなすことができる。</li> </ul>

### 3. 実施結果及び考察

本研究では、平成27年度教職実践演習（幼稚園）受講生のうち、4月・9月・1月の「履修カルテ」記入の条件をすべて満たしていた126名を対象と

し、各カテゴリーの到達確認指標の自己評価および記述について分析を行った。

(1) カテゴリーごとの評価結果

まず、6つのカテゴリー「教育の本質の理解」「子どもの心とからだの理解」「保育の表現技術の修得」「保育の内容・方法の理解・修得」「実践力の修得」「課題探究力」について、各項目 A～D の回答数の割合の変化を図1から図6に示す。すべてのカテゴリーで、4月・9月・1月と自己評価の回を重ねるごとに、A 評価の割合は高くなり、逆に C 評価、D 評価は低くなっていることが示された。つまり、1年の学習を重ねることで、学生たちは各質問項目に対して知識・技術を修得できるようになったと自己評価を高めていったことがわかった。

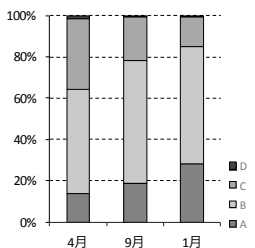


図1 「教育・教育の本質の理解」

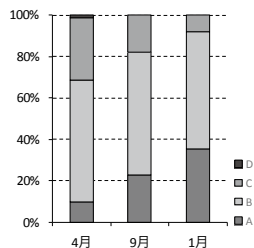


図2 「子どもの心とからだの理解」

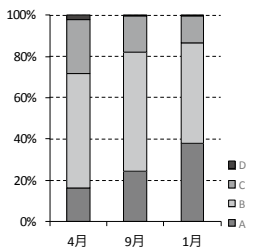


図3 「保育の表現技術の修得」

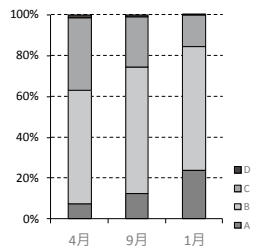


図4 「保育の内容・方法の理解・修得」

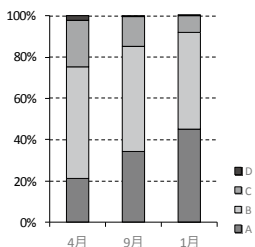


図5 「実践力の修得」

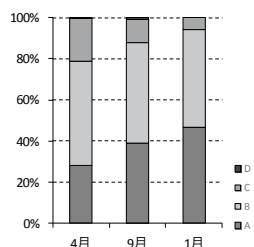


図6 「課題探究力」

(2) 各質問項目の評価について

次に、各質問項目における評価の特徴及び時期による変化を検証するために、A:3点、B:2点、C:1点、D:0点に換算し、それぞれの平均点と標準偏差を算出した。また、時期による変化を明らかとするため質問項目ごとに4月・9月・1月における1要因の分散分析を行った(図7から図12)。

「保育・教育の本質の理解」については②を除く5つの指標について4月から9月にかけて評価が上昇したが、9月から1月で差が見られたのは②と④の2項目であった。この結果は、保育・教育の本質を扱う科目は理論科目として1年生に開講されることが多いことが反映されているためと考えられた。また、②については保育の理念・歴史、④については保育の社会的・制度的・経営的理解についての指標であり、全体として自己評価が低いが、後半にかけて理解を深めていく傾向があるのではないかと考えられた。

「子どもの心とからだの理解」については、①の心理・発達の理論の理解は9月・1月ともに評価の上昇が認められたのに対し、②の問題を抱える子への理解は9月に、③の健康・安全についての理解は1月に4月との差が認められた。①心理や発達論の基礎理解・②健康や安全の理解に関する項目については、1年生の理論的な学習に加え、実践を重ねることで理解を深めたとの実感につながったのではないかと考えられた。また、②虐待や問題を抱える子どもの理解に関する項目については、特に2年前期に該当する授業が開講されたことや施設実習での学びが影響していたと考えられた。

「保育の表現技術の修得」については、4月と1月では差が示されているものの、4月と9月、9月と1月の差には項目によりばらつきがあり変化の仕方は項目により異なる特徴が示された。特に①の音楽表現については他と比較して標準偏差がやや大きいことから、個人差が大きいことも考えられた。

「保育の内容・方法の理解・修得」については、④の指導法、⑥の教材に関する項目では4月から9月にかけて得点が上昇しているのに対し、①集団形成・②幼稚園教育要領や保育指針・③教育・

保育者養成における学びの記録の効果的活用

保育課程の編成に関する項目では9月から1月の得点が上昇した。保育内容を扱う科目は1年・2年を通して数が多いが、実習等における実践を通してより理解を深めていると実感していることがわかった。

「実践力の修得」については、⑤保育の展開・⑥子どもに対する態度・⑦社会人として基本的事項の項目で9月から1月への変化が少なかった。しかし、この3項目は他に比べて4月から自己評価そのものが高傾向にあり、学生たちの実習の準備や基本的態度に対する自己評価は高い傾向にあることがわかった。

「課題探求力」については、①自己課題・②社会情勢に関する項目については9月から1月に、④他者との協力・⑤集団における役割の項目については4月から9月に変化が大きいことが示された。これらについては、授業等におけるグループ学習、実習や就職活動などの影響を受けているのではないかと考えられた。

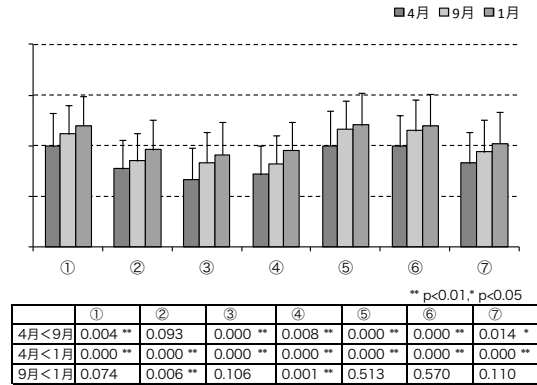


図7 「保育・教育の本質の理解」の平均得点と分散分析結果

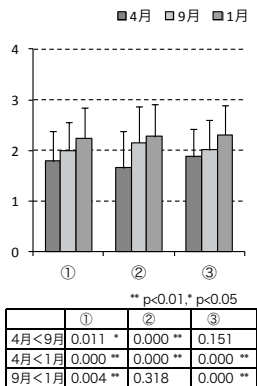


図8 「子どもの心とからだの理解」の平均得点と分散分析結果

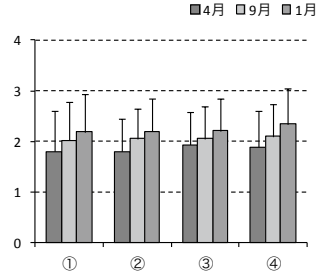


図9 「保育の表現技術の修得」の平均得点と分散分析結果

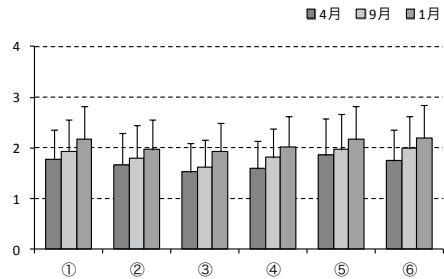


図10 「保育の内容・方法の理解・修得」の平均得点と分散分析結果

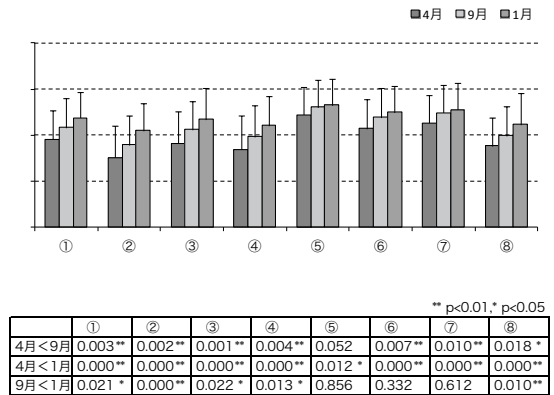


図11 「実践力の修得」の平均得点と分散分析結果

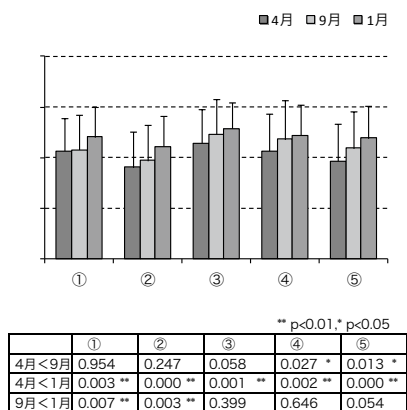


図12 「課題探求力」の平均得点と分散分析結果

### (3) 記述項目について

6つのカテゴリーにおける「保育者になるために特に取り組んだこと・努力したこと」の記述については、学びの内容を振り返り授業内の課題に取り組んだ内容を中心に記述された。また、特に9月・1月の記述では直前に行われた実習との関連、教職実践演習での課題、オープンキャンパスやボランティアでの経験についての記述もされており、授業科目における学びとの履修カルテの記入を通して、授業科目における学びと実践を結び付けようとする姿がみられた。

「達成点・問題点」については、カテゴリーごとの記述内容からそれぞれが次の課題を意識していることが、それぞれの学生の記述から見て取ることができた。特に実習と就職活動が重なる9月の時期、就職を目前とした1月の時期の記述では、各科目の学びを実践に向けての課題に転換して自己課題を設定している様子がうかがわれた。しかし、回を重ねるごとに記入が雑になるなど、自己課題を真剣に考える態度が薄れていく傾向の学生も中には見られ、記入の機会の持ち方や位置付けを繰り返し伝えていくことは課題となった。

### 3. まとめと課題

今回、カリキュラムツリーから各授業の位置づけや到達課題を意識し、免許・資格に向けた学びを確認するとともに、自己の課題を設定するための「履修カルテ」を作成し試行を行った。分析を行った結果、3回の記入を通して、学習を重ねることで、学生たちは各質問項目に対して知識・技

術を修得できるようになったと自己評価を高めつついったことがわかった。また、到達確認指標によって得点の変化には異なる特徴が見られ、授業や実習、就職活動などの取り組みなどが反映されていることがうかがわれた。「達成点と問題点」「次の課題」など自由記述については、各授業の学び～実習や就職といった実践を意識した具体的な目標へと転換していることが示された。これらのことから、今回の試行における「履修カルテ」の記入は、カリキュラム全体を意識して学びを捉えなおす機会となっていたと考えられた。

しかし一方で、各カテゴリーの到達確認指標と科目における課題のつながりが理解しにくいとの声もあった。また、記述の分析からも、学生の学びの記述とカリキュラムツリーにおけるカテゴリーが必ずしも一致していないことも多かった。今後は科目ごとの達成確認指標と自己評価項目の整合性についてカリキュラムツリーやカリキュラムマップをもとに、授業等での学習とカリキュラム全体のイメージをつなぐ方法を検討していきたい。また、学びを継続した一連のものとして学生に意識づけるため、実習や就職指導などと連続性を持たせる工夫や、学生の記録をもとに教員が指導・評価を行う方法について検討することが課題となる。

### 参考及び引用文献

- 文部科学省 (2010) 「教職実践演習における履修カルテの作成・活用例について」.
- 小山優子・栗谷とし子・白川浩 (2012) 「保育者養成における「教職実践演習」の取り組み(1)」、島根県立大学短期大学部松江キャンパス研究紀要 Vol. 50, pp.53-62.
- 新田 司 (2013) 「短期大学における「教職実践演習」の取組状況について」千葉敬愛短期大学紀要 (35), pp.11-28.

## **Effective utilization of the learning Record for Training of Teacher in Early Childhood Care and Education**

Noda, Satomi\*

本研究では、カリキュラムツリーから各授業の位置づけや到達課題を意識し、免許・資格に向けた学びを確認するとともに、自己の課題を設定するための「履修カルテ」を作成し試行を行った。分析を行った結果、3回の記入を通して、学習を重ねることで、学生たちは各質問項目に対して知識・技術を修得できるようになったと自己評価を高めつついったことがわかった。また、到達確認指標によって得点の変化には異なる特徴が見られ、授業や実習、就職活動などの取り組みなどが反映されていることがうかがわれた。「達成点と問題点」「次の課題」など自由記述については、各授業の学びから実習や就職といった実践を意識した具体的な目標へと転換していることが示された。これらのことから、今回の試行における「履修カルテ」の記入は、カリキュラム全体を意識して学びを捉えなおす機会となっていたと考えられた。

キーワード：履修カルテ、学びの記録、自己課題